

法門の前後で回数そのものに変化はないようである。しかし、御前と謁する機会は増えていると見ることもでき、御前法門は大成功であったと言えよう。

しかしながら、宝永四年十一月二十三日富士山が噴火したときも、真つ先にしたことは護持院に千手法を修させることであった（『常実記』）。また、生涯生類憐愍令を保ち続け、庶民を苦しめたことも事実である。頭では理解させても行動を伴わせることはできなかった。最後も東叡山に葬られることになるのである（『文昭院殿御実記』以下『文実記』）。

第四項 家宣と祐天

宝永四年、次の將軍家宣の子である家千代が七月六日に生まれたが、九月二十八日に亡くなられた（『常実記』）。生まれてまもない子であったが知幻院殿と諡され、伝通院に葬られることとなった（『常実記』）。祐天が導師を勤めた（『略記』）。このとき使われたと思われる「白鼠編子葵御紋附打敷」は祐天に贈られ、それが神奈川県良忠寺復興（正徳二年五月祐天により知恩院直末に加えられたと言う。『良忠寺誌』（昭和四十六年、八頁））の際に贈られ現在に至っている。祐天はたとえ將軍家よりの拝領物であっても自分の手元に置くことはなく、念仏弘通のため必要と考えられれば寄付をするなど、私利私欲のない人柄が知られるのである。

また、家宣二男大五郎も同年十二月二十二日生まれた（『常実記』）が、宝永七年八月十三

日に逝去し（『文実記』）、祐天が導師を勤めている（『略記』）。

『実録』によると先亡の二子さえも伝通院に改葬したと出ている。この記述は『略記下書』に書き足される形で出てくるのであるが、『実録下書』附には、清寿院と清閑院とあり、『実録清書』附には、清寿院と清花院と出る。

残念ながら「伝通院志」（『浄全』十九、七一―九頁）や『奠香録』によると清寿院は延宝四年十月天徳寺より改葬され、また清華院は延宝三年伝通院に埋葬されたことになっている。この二子はいずれも綱重の子供で家宣の兄弟ということになる。したがって家宣の信仰によって改葬されたのではなく、家宣の兄弟の眠る伝通院に自分の早世した子供を葬ったと考えるのが自然であろう。しかし、ここに当時住職をしていた祐天との深い接点が見出されるのである。

宝永六年正月十日綱吉薨去し（『常実記』）、五月一日家宣が正式に将軍となる（『文実記』）。家宣は生類憐愍令を廃し（『文実記』同年正月二十日）、護持院の住職を交替させ、隠居隆光に「みだりに徘徊なすべからず」と申し渡す（『文実記』同年八月四日）など、城内外の改革をすぐさま開始した。大奥も綱吉夫人以下綱吉に仕えていた者皆落飾（『文実記』同年正月十八日）した。

家宣の代となり、最初に祐天が響応を受けるのは宝永七年二月二十九日のことであった。実はこの十二日増上寺門周は老衰を理由に辞職を申し出ていたが慰留されたばかりであった。

このときは猿楽を「増上寺大僧正門周。伝通院祐天はじめ。寺中のともがら皆見ること許され饗を給」わった。回数は減るが、同年九月二十五日（奥・申楽）・宝永八年（正徳元年）四月十八日（奥・猿楽）と城内に呼ばれている（以上『文実記』）。

また、宝永六年から門周と祐天は歳暮の品を持って登城するようになったことも新しい習慣である（『文実記』）。

正徳元年十二月五日、増上寺門周よりの隠退の願いが許され、翌六日祐天は増上寺住職を命ぜられ即日大僧正に任ぜられたのである（『文実記』）。『文実記』では門周の隠退の真相はわからないが、「縁山志」十（『浄全』十九、四九六頁）の第三十五世門周の伝によると、幕府より「一代六度の出火三国に前代未聞」と言い隠退願いを催促されたことが書かれている。

表面的には、家宣と祐天は饗応の席上、ならびに子供の葬儀などでしか会っていない。しかし、祐天が増上寺住職に上任しただけでなく即日大僧正に任ぜられたことに、家宣の隠れた祐天に対する崇敬の念が感じられるのである。増上寺住職の大僧正は了也から始まり、即席大僧正の任官は祐天より始まったのである（『実録清書』附）。

祐天七十五歳であった。